

当別文芸の会だより NO.42

H25・9/16 発行 (連絡先・河地良一 TEL23-2103)

9月の読書会も宇江佐真理の作品でした

9月の三連休の初日、14日(土) 13:30からの白樺コミセンでの読書会には8名が参加されました。前回に続き堀江三千代さんの司会で進められた読後感想交流は、少人数でしたが話題が広がり、盛り上がりました。

函館出身の作家・宇江佐真理(うえざまり)の「蝦夷拾遺・たば風」(文春文庫)6編の中から、今回は「恋文」「錦衣帰郷(きんいききょう)」の2編を取り上げましたが、「恋文」では幕末のころの男性、女性観が話題となり、文中の妻からの熟年離婚を考える心境などは、それぞれの立場からどう理解するかの交流で、話題が現代の夫婦観にまで発展しました。

「錦衣帰郷」では同じく幕末の探検家・最上徳内を取り巻く郷里の人たちの生き方や、彼のアイヌの人たちへの接し方などが話題となり、作者の蝦夷と呼ばれていた当時の歴史をよく調べた上での物語の構成に、ほかの作品への関心も高まった今回の読書感想交流でした。

作者はまだ60代の前半ですから「北海道をテーマに時代小説の新しい分野が生まれることに期待」というのが参加者の大方の声のようでした。

7月「文学散歩」の収支報告をしました

収入は参加者38名の合計153,100円です。支出はバス代、入館料(2館)、昼食代、その他経費の合計152,891円で、差引き209円は、「当別文芸の会」会計に繰り入れ、詳細は次年度総会で承認をいただきます。

次回の10月26日(土)は「文芸セミナー」です

テーマは北海道の歴史をもっと知ろう「北をめざす龍馬」で①講演「坂本一家と北海道開拓」②DVD視聴「一人でなりとも～北の龍馬列伝～」③文芸セミナー「龍馬の志に何を学ぶか」を予定しています。案内を同封いたしますのでPRをお願いします。町教委の「町民自主企画講座」の指定を受け、会場は「ふれあい倉庫・カルチャーホール」で13:30開会。参加費は500円です。

第5回例会は太美町から渡辺さん、札幌市清田区から三浦さんがはるばる参加され、総勢14人で時間が足りないほど多くの意見が出ました。渡辺さんは、以前町内で『大地の侍』を劇化した際に、「玉目トキ」役を演じたそうです。

この日の話題提供者は松本弘さんで、あらすじから始まり、各節ごとに丹念で具体的な課題の提起をしていただき、それに基づいて各自が意見を述べ合うという形で読みを深めました。

まず第七節、第八節では松岡長吉と三谷三次の確執、特に松岡長吉の阿賀妻を頼る気持ちや、三谷三次の鬱憤、及び阿賀妻の「何！負けたとな！」という台詞の意味合いについて話題になりました。ぼこぼこに殴打されたとはいえ、刀を抜かずになすがままにされていた松岡の行動は、喧嘩には負けても「武士魂」を活かした天晴れな行動、「信念を持って（刀を）抜かなかった。」というあたりに落ち着きました。また「兵糧米を廻漕してくる。」や「頑固な火縄銃」など、武士としての暮らしぶりから離れられない…という意味合いと、事実小樽から船による運送だからとい解釈があり、読みが広がっていく跡を辿ることができました。

第九節からはトウベツ道開削の描写が中心で、鶯の声に故郷を偲ぶ姿や、事態の成り行きに戸惑ってきた回想シーンが出てきて、第十節の冒頭の解釈についても話題となりました。その中で「うけがわれない」の意味について、「肯う＝承知する。承諾する。」では、上島さんの電子辞書が効力を発揮しました。歴史の大きな流れの中で翻弄される人間達の心理と葛藤の読み取りに加えて、果たしてどこを通過してトウベツ道を開削したのか…も話題になりました。

そして第十一節では「ここがトウベツ」「わがトウベツ」で報われることになり、堀江さんからは、七月に行われた「石狩川文学碑」の献花式でもこのシーンを朗読しました…という報告がありました。そういう意味で今回は描写に強弱、緩急があり、物語として面白く、同時に邦直の笠の汚れや阿賀妻の頬のやつれぶりから、開拓団の苦闘が鮮やかにイメージ化されました。「読む会」の活動も峠を越えて、いよいよ後半へとつながっていきます。

次回は、10月15日（火）、内容は第四章第一節から第四節、p246からp286までで、話題提供は渡辺さんです。皆様のご出席を期待しています。

<文責 東前>